南河内の伝統工業

43期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

祖父母の家の近くで、「日本で使用されている“つまようじ”のほとんどが、ここ河内長野で作られている」という立て札を見つけた。祖父に聞いてみると、最近使用している家は少ないが、“すだれ”も河内長野周辺で作られているらしい。では、これらの歴史・地理的背景は？、他にはどんなものが作られているのか。ここに興味を持ち、自由研究として取り上げてみることにした。

Ⅱ　研究方法

(1)あらかじめ、年長者に南河内の伝統工業について尋ねておく。
(2)図書館・市役所で資料を集める。
(3)資料館・工場を見学に行く。
(4)研究したことをもとに、今後の伝統工業について考える。

Ⅲ　研究内容

当初の予定では、河内長野・富田林・狭山について調べるつもりだったが、狭山には伝統工芸と断定できるものがなかったので、河内長野・富田林にのみしぼって、研究を進めていった。

▶富田林 ――――――

S30年頃は、それはもうグラスボール、竹すだれ、竹籠などは全国でも有数の産地であった。しかし、わずか30年足らずの間に、都市形態は農村型から都市型へと移行し、産業構造は一変したと言っても過言ではない。

そんな中にあって今なお、この町の産業をになう活動が続けられている。

▲写真1　すだれ工場の様子

真っ赤に溶けたガラスに向かっての真剣なまなざし、呼吸と手さばきから生まれるグラスボールやガラス工芸品。

青竹を削り、細い白いヒゴさばきから生まれる竹すだれ、煤竹から編みあげられる竹籠。

これら「ガラス細工」や「竹細工」は、どちらも手作りの“伝統”を守りながら、常に新しいものに変えられてきている。

それでは、1つ1つの伝統工芸について詳しく説明してみようと思う。

(1)　ガラス玉（グラスボール）工業

金銀や赤、青など色彩豊かな飾りつけとして私達の目を楽しませてくれるグラスボール。このグラスボールは、富田林市で作られるようになって80数年の歴史がある。そして今もクリスマスツリーの装飾品として、喜志・富田林地区で作られている。

①起源、発達過程

明治40年頃、青木和三郎氏が、堺筋（富田林町）の上田氏の一隅で「ほうろうビーズ」の製造を始めたのが起源であるといわれている。当時は、仏事用としてインド・エジプト・南洋の一部に輸出されていた。

明治45年には、市内で千人の人が家内の手仕事として下請けをし、年産当時の金額にして約３千万円に達した。

大正３年頃には、全国生産の大半を占めるようになり、アメリカにも輸出するほどで、大正９年頃が最も隆盛であった。

昭和当初の不景気から第２次世界大戦まで生産は中止されていたが、小田保次氏が戦地から帰還され、グラスボール工業こそ戦後の経済困窮を打開するのに最善の工業だと、復興にかかった。

昭和22年頃から再び勢いを盛り返し、26年には価格にして10億円も輸出するようになり、富田林・古市（羽曳野）両地区で全国生産の約７割を生産するに至っている。

ところが、46年のドルショック、48年のオイルショックなどの不振により事業所は急減し、この産業も今やかすかに面影を残すのみである。

②問題点

・ガラス吹きなど技術習得に時間がかかる。
・グラスボール工業だけで生計をたてていくのは難しくなってきた。
　——→後継ぎがいない。
・グラスボールは季節的なもので、年１回の受注生産であるため、先の見通しが立たず、計画生産ができない。

▲写真２　グラスボール工業

③現況

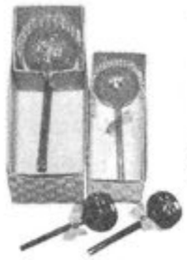
20年程前には10数軒あった事業所も、主軸となる人の高齢化と、若い後継者がいないこととが相重なり、現在グラスボール工業をしているのは唯一１軒である。

○ガラス細工作りへの転換

・ビードロやトンボ玉
・ポッペン
　（吹くと音が出るガラス玉）

などという、江戸情緒の漂うおもちゃが多い。

・グラスアニマルとして十二支を始め、カモシカ・パンビなどもある。



▲写真３　ポッペン

▲写真４　トンボ玉

(2)　竹簾（すだれ）工業

夏には、日よけ、カーテン代用として涼しさを呼ぶ商品に「竹すだれ」がある。この竹すだれは、グラスボールと並ぶ富田林の伝統産業として、今日も若松町・中野町などで作られている。

①起源、発達過程

歴史はグラスボールより古く、明治10年頃、新堂で「京すだれ」として全国的に有名な、京都伏見の職人をやとって始められたのが起源。その頃は、国内需要だけで、大阪市の荒物屋との間で取引されていた。

昭和23年から25年の最盛期には年間８億円をアメリカに輸出し、市内業者50数軒が名実ともに富田林の特産すだれとして、大阪府下生産高の６割以上も占めていた。

では、何故新堂地区にすだれ業が盛んであったか。

——同町はもともと竹細工が盛んで今から約300年前、武士がこの地にきて世を忍ぶ中に籠（かご）を作って村人に伝えた。

又、この地区は竹細工の原料になる竹が、石川西岸の竹やぶに密集していたため立地条件が良好であった。

ゆえに、明治10年頃、すだれ業へスムーズにはいれた。

このように、新堂地区の竹すだれ業は、竹籠→京すだれ→本すだれ：（割すだれ・ひごすだれ）と発展していった。

太平洋戦争前の昭和15年頃は、戦前として最盛期にあった。戦争中は生産そのものが不可能となったが、戦後再び開始され、アメリカなどは、年々新しいカーテン代用として我が国に注文するという好況振りであった。

ところが昭和28年に至って異常な多雨の天候により、品質も低下してクレームが続出した。その後、生産高は下向きになったが、今日では、市の伝統産業として引き継がれている。

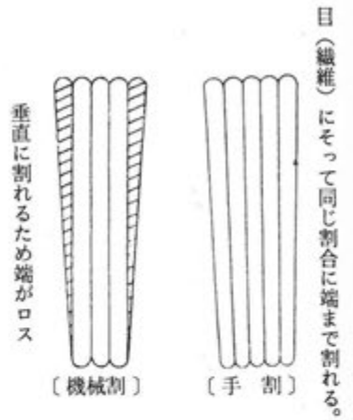
②問題点

・人手不足
・ナイロンの進歩
・竹材の減少
・冷房器具の出現
・中国産の天津すだれの出現

・完全な機械化、工場化出来ない
・機械化したときの、ロスの問題
・竹すだれは家内装具品で半ば手芸品である。だから、どうしても仕上げ等の工程で手工とならざるを得ない。

③現況

伝統を誇る民芸品として今日では、新しい販路を求めて国内はもとより国外との引き合いが続いている。その代表的なものとして、2つあげられる。どちらも昔のままの編み方の手作りで、優美・高級竹すだれと言えるだろう。



▲図1　機械割のロス

座敷用竹すだれ……若松町の杉田さんで作られ、親子5代に渡って守られている。
みす……若松町の田中さんで、親子3代に渡って作られ、神社仏閣用みすとして、天理市などに出荷されている。

現在、業者は10数軒だが、日本的な風流さが今も守られている。

▶河内長野

(1)　爪楊枝（つまようじ）工業

①ようじの歴史

奈良時代（538年）に仏教と共にインドから中国・朝鮮半島を経て日本に伝わった。当時は“歯木”と呼ばれ、木の枝の一端を噛んで毛筆の毛先のようにブラシ状にしたものである。そもそも、お釈迦さま（B.C500年頃）が弟子達にこの歯木で歯を清潔にすることを教えたのである。お釈迦さまが使ったその小枝を野原に投げられると大木になり、人々はそれを“歯木”と名づけ、その後この木の枝を使って磨くようになったといわれている。

インドではニームという木の枝を用いた。中国にはこの木はなく、よく似た木ということで楊柳を用いた。それでようじを楊（やなぎ）の枝すなわち、楊枝と書く。

最初は僧侶に取り入れられ、平安時代に一部上流社会に伝わり、江戸時代には房楊枝と呼ばれ庶民にも広がった。一方を房状にし、もう一方の先を鋭くして用いられた。この先を鋭くした方が「爪楊枝」（爪先でつまむ楊枝）と呼ばれ現在のようじになり、房状の方は明治になって「歯ブラシ」になったがルーツは同じである。

このように、楊枝と仏教は大変関わりのあるものなのである。

村内（和泉山脈）に原木があるので大阪か浅草からの技術導入に成功した。
・当時、農家の女子の副業は主に木綿職だったが、それに比べてつまようじは、作業は簡単で資本を要しない。
——→ 従業者次第に増加

・消費地大阪を近くに控えていた。
——→ つまようじ工業が定着し、存続できた。

②つまようじの色々

爪楊枝は消耗品である。あくまで1回性のその場限りの物であるから、需要は極めて大きい。又、プラスチック製品のように流行性がない。

用途にしても、楊枝本来の機能だけではなく多方面に開拓されてきたこともあり、生産は安定している。

▼図2　楊枝の種類、用途

品　名	形　状	材　質	断面	用　途	歯用
黒文字 くろもじ	昔ながらのようじで黒い皮がついています	黒文字	□	和菓子用	×
うつぎ COCKTAIL PIC	黄色っぽく品の良い木です	字津木	○	果物を突き刺したり料理用に用います	×
つまようじ COCKTAIL PIC こけしようじ 両先ようじ	日本で通常用いられています 欧米では料理に用いるので両方とがっています	白　樺	○	果物を突き刺したり料理用に用います	×
平ようじ FLAT TOOTH PIC	薄く平らで駅弁の割箸にはさまっています	白　樺	□	歯に詰まったものを押し出します	△
デンタルピック DENTAL PIC	歯と歯の間の形に合わせて作られています	白　樺	△	歯に着いた汚れをとり、歯グキのマッサージも出来ます	○
糸ようじ FLOSS PICK	撚りをかけていない糸の束です	ポリエステル糸		歯と歯の間が接している部分の汚れをとります	○

・黒文字の市場は、東京中心である。

だいたい、東京70%、大阪20%、その他10%で、日用雑貨や荒物問屋に送る。大阪、その他では、高級料亭・旅館・食堂等で消費される。

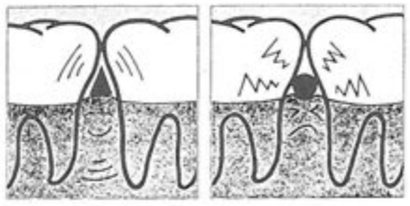
・その他特殊な高級楊枝は東京の他、京都の祇園、大阪の心斎橋などで売れる。

・白樺楊枝は全国的に販売している。

上記のように、数々の種類のようじが現在作られているが、最も私の興味をそそったものは、デンタルピックつまり三角ようじであった。

つまようじ資料館に行って話を聞くまで、私は「ようじは歯に悪い」と考えていた。しかし、外国で多く使用されている三角ようじは、歯に悪いどころか、歯の健康に非常に良いらしい。

右図に示したように、左の方の三角ようじであれば
・木はだ液を含んでやわらかくなる。
・木は表面がザラザラしているので汚れがきれいにとれる。
→・歯間乳頭、つまり、上の2面でクリーニング、下の面で歯ぐきのマッサージ。


▲図3　ようじで歯の手入れ

日本では三角ようじはあまり使用されていないが、ヨーロッパでは身につけて持ち歩いている人が多いらしい。なぜなら、ヨーロッパでは日本のように歯に保険がきかないためである。自分の歯は自分で！ということらしい。

大昔、彼らは狩漁民族であった。日本は農耕民族であったのでつぶして食べることは可能だった。だがヨーロッパ人にとっては、歯がなくなる＝命がなくなると考えられていた。逆にいうと、歯は手入れさえすれば、いくらでも使えるのだ。

③現況

河内長野市における楊枝の工業統計

業者：20社　〈1989年〉
生産量：600億本（全国の約96％）
全出荷額：50億円／年
白樺原木消費量：50万㎥／年
白樺丸軸生産量：7,000ｔ／年
黒文字出荷額：２億5,000万円／年
宇津木出荷額：5,000万円／年

▲写真５　工場で作られている楊枝

(2)　竹簾（すだれ）工業

形態としては、富田林と同じなので、ここではあえて説明を省略する。

Ⅳ　まとめ

伝統工業を調べるに当り、時代の流れと共にその産業が生き抜いていくことの難しさを痛感した。全ての産業は大小の違いはあっても手作業が出発点となっていることは、周知の上であるが、やがて大量生産を目的とする機械化が必要となり、産業として成り立っていく。そして又、技術革新を繰り返し発展していかなければならない。発展していくためには、需要の拡大と将来に続く後継者が必要となってくる。工業によって実態は様々であるが、作り出される製品を使うのが人間である以上、その中に何か手作りの味が求められ、伝統工業が今も生き続けている。そこには発展への絶え間ない知恵と努力が必要である。

時として、利潤追求を重視する考えについ走りがちであるが、人も産業も「生きる、生かす」という根底に流れている大切な事に、目を向けていかなければならないと思う。

Ⅴ　総括

今尚、問題を抱えながらも地域産業を守り続け、新たなる意気込みを持つ人々の粘り強い努力に触れる事が出来たのは貴重な経験であった。今回調べたのは、基本的に平和産業である。これらを守り続け、味わえる様な平和な世の中を、持続させなければならない。

Ⅵ　参考文献・協力

「河内長野市の爪楊枝工業」　大阪府爪楊枝協同組合　昭和51年発行
「ぶんかの里」　富田林市産業部商工観光課　平成元年発行
「まちの産業」　富田林市発行　“つまようじ資料館”㈱広栄社